

### 『全国木簡出土遺跡・報告書総覧』の刊行

九七五遺跡、三二万一一八四点。この本に載せられた、二〇〇二年末段階における全国の木簡出土遺跡と出土点数である。

『総覧』に結実する作業は、本誌第一〇号に掲載された寺崎保広氏によるリスト（一九八七年末段階、二六八遺跡、九万三六四八点を補訂する形で、二〇〇二年二月に着手された。予想されたこととはいえ、この一五年間の木簡出土遺跡の増加には目をみはるものがあり、遺跡別・調査次数別に報告書の刊行状況を確認し、その記述と釈文・実測図・写真図版を一点一点対照する作業は、一個人の手作業では遅々として進まなかった。

そこで、着手後一年余りを経た二〇〇三年度以降、作業の体制を整えなおして、編集を進めることとなった。寺崎氏には共編者として名を連ねていただき、全国の、一〇〇名を優に超える方々にご協力いただいた。これにより、編集は一気に本格化していった。編集が進むにつれ、公表されている木簡出土点数の概数は、当初漠然と把握していた二〇万点を大きく上回り、二二万から二三万点、二六万から二七万点へと、度々修正されていった。丸二年の歳月を費やして実を結んだこの成果は、二〇〇四年二

月、奈良文化財研究所からは『埋蔵文化財ニュース』一一四号として、当学会からは本誌第二五号の巻末付録ではなく『総覧』として、それぞれ刊行された。学会発行分は、会員に配布されるほか、木簡出土情報の蒐集が、全国の発掘調査機関の調査担当者の方々に支えられていることに鑑み、創刊以来二五年間のご執筆者八八九名全員にお送りすることとした。今後一〇年間を目途に、新たにご執筆いただく方へも配布する予定である。

『総覧』は、現段階で最も充実したデータ集であるとともに、ここに採られた延べ五五〇〇件を超える関係文献を紐解くならば、木簡の調査研究史そのものを語る最良の道案内ともなる。木簡を調査する際に、出土遺構や遺跡、さらには地域に密着した木簡の研究を志す際に、この本が大いに活用されることを望む。

『総覧』刊行から半年余りを経た現在、確認された出土木簡は、一〇二八遺跡、三一万六〇〇〇点以上に及ぶ。もちろん、まだ出土の事実を知り得ていない木簡や、未報告の木簡も多いと推測する。その背後に、墨痕に気づかれないまま保管されている、木簡とすべき出土木製品が大量に存在するであろうことも想像に難くない。三一万点の木簡が、大海の一滴に等しくなるほどの不断の史料蒐集が、我々に課された責務のように思われる。

（山本 崇）